

いそつぶ物語

其五十 毒虫に刺された子供

子供が毒虫に刺されたといつて、大急ぎで、かつ母さんの所へ駆けつけて来て、『おつ母さんく私ね

極そーつと、捉んだのだけど、こんなに甚く虫に刺されてよ』といつて痛さうに、指尖を見せるとおつ母さんは『そーよ、そーつと捉んだから、そんなに刺されたのさ、だから今度から、捉へるならしつかり捉へなさい、そしたら、決して刺されないから』



何でも、すべき事は、か一杯にする事です

續其五十一、天文學者

或所に、一人の天文學者が、ありまして、毎晩々々仰向いては、天の星を見て考へて居りました。或

夜、何時もの通り、市街へ出て、一生懸命に、空の星を眺めながら、歩いて居る中に、間違つて深い井の中に落ち込んで仕舞ひました。先生吃驚仰天、面も半も足も瘡だらけになつて、大聲を上げて、助けをよんだ所が、隣りの人が聞きつけて、駆け出して来てくれ

て、やつと助かつた。其處で、其人が、先生の井に落ち込んだ譯を聞いて云ひますには、

『オヤ、何といふ事です、先生は、天の事ばかりお考へなさつて、地の上に何があるかをお考へなさらなかつたのですか』

其五十二、牛と蛙と、

一匹の牡牛が、水溜りへ来て、水を飲んで居る中計らず、一匹の蛙の子を履み潰しました、其後へ蛙のおつ母さんが戻つて来て、子供が一匹足りないといつて大騒ぎをして、兄弟の蛙に、どうした事かと尋ねました、すると、兄弟の蛙どもは、口を揃へて、『可愛相に死んだのよ、おつ母さん、たつた今の前ね、四本足を持つた、大きなく獸物がやつて来てね、あの割れた蹄で壓し潰ぶして置いて、行つたのだもの』といひますと、おつ母さ

んは、いきなり、力一杯に、自分の身體を膨脹かせながら、『では、其獸物といふのは、これ程も大きかつたの』と問ひますから、子蛙は吃驚して、『わら、おつ母さんつてば、そんなに膨脹らかすのは廢して頂戴よ、そして、もう怒らないで下さいな、何故つて、おつ母さんは、あの獸物の大きさを真似ようとしたつて、反つて自分で破裂けて仕舞ふですもの』

其五十三、小山羊と狼、

小山羊が、屋根の上に登つて、こゝなら大丈夫安心だと澄し込んで折ふし其下を通る狼を見て、切に悪口を吐いて嘲弄します。すると狼は夫を見上げて、『馬鹿め覺えて居るい、併し、實際乃公を輕侮して居るのは、貴様でなくつて、貴様の立つて居る其屋根なのだ』

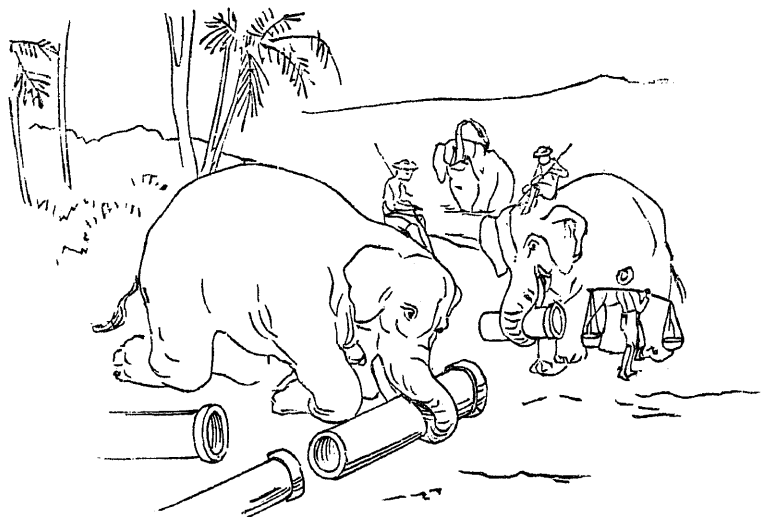
時と場所とは、屢々強者に對する弱者に利益を與へることがあります。

其五十四、お老婆さんとお醫者

年取つたお老婆さんが、眼が見えなくなつたのでお醫者さんと呼んで治療を頼みました。そして、こう云ふ約束をしました、若し、お醫者さんが、眼を元の通り見える様にして下さるならば、お老婆さんから、幾らかの金を御禮する、併し直らなければ、一文も拂はないといふ事なのです。そこで、お醫者は、毎日／＼來て見ては、眼に藥を注して歸ります。但し、其度毎に、少しづつ、家の道具を盗んで行つて、とう／＼お老婆さんの持物を悉皆なくして仕舞ひました。さて、皆盗んで仕舞まつてから、お醫者は、お老婆さんの眼を直して約束通りお金を下さいと申しました、所がお老婆

さんは、眼が見える様になつてから、そこいらを見廻はすと、家中丸で空虚で、自分の持物が一つも在りませんから、お醫者さんにもお禮をしません、併し醫者は貰はねばならぬと言ひ張るし、お老婆さんは拂はないといふ、とう／＼裁判所へ持ち出しました。其處で、お老婆さんは、裁判官の前に立つて述べますには、

『なる程、お醫者さんの申す事は嘘ではありませぬ、私は確に、私の眼が見える様になつたら、お金を拂ふし、直らなければ拂はないと云ふ事を約束しました。そこで、彼の方は、私が眼が直つたと仰しやるのです、然し、反對に私は、まだ直らないと確信します、何故と申しますに、一體私の眼が見えなくなつた時には、私の家の中には、價値のある品物などか澤山あつたのです、夫だのに



今あの方は、確に直つたと仰しやるけれども、私
は家の中で、何一つ見る事が出来ません」

象のお話 (二)

前回には、森の中の象のお話をしましたが、今度
は、少し、馴れた象のお話をして見ましよう。

前にも申しました通りセイロン島の森には、澤山
な象の群が棲まつて居りますが、土人は彼等を生
け擒つて来て、だん／＼に馴らして、おしまひに
は、橋を架けたり家を建てたりするに、いろ／＼
な仕事をして、大變役に立つ様になります。

象の中には、まことに綿密に注意がよく行き届く
者がありまして、例令ば言ひ付けられた通りに材
木なり煉瓦なりを並べる時などは、一度並べて見
て夫から、二三尺後へよつて、眞直に並んで居る